埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	文化構造研究専攻		学籍番号	05CS028
氏名	中澤　哲夫	ローマ字	Tetsuo Nakazawa	国籍（留学生）

修士学位論文名特定課題研究名	考えるということ　―相対主義の果てに―		
提出年月日	平成 20 年 1 月 10 日	指導教員	高橋克也
体裁（　論文　）		言語	日本語
別冊添付資料等			
キーワード	相対主義		

哲学とは何か。それは「考える」という心の働きである。古代ギリシャ以来、哲学は様々な問いを投げかけ、様々な解答を与えてきた。とどまることなく歩み続ける哲学という学問を「考える」という観点から捉えなおした時、そこに見えてくるのは「終わらない哲学」という姿である。本論では、相対主義の論理構造に着目し、そこから概念枠の無限後退を引き出すことで、「考える」ことの永続性について論証する。

相対主義とは「真偽や善悪などは、それを捉える「枠組み」や「観点」などに応じて変わる相対的なものであり、唯一絶対の真理や正しさなどはない」という思想のことである。すべてを疑いニヒリズムへと至る懐疑主義とは違い、絶対的な存在を否定することですべてを肯定しようとする力が相対主義を構成させる原動力となっている。歴史的な視点から眺めてみると、相対主義が登場する背景には社会の急激な変化があった。急激な社会変化が人々にもたらす不安への精神的な盾として、この思想が果たした役割は大きい。このような影響力からか、相対主義は単に社会に対して適用されるだけでなく、文化・価値・歴史など様々な文脈において活用されてきた。それら相対主義の多様性から、この思想のもつ 6 つ要素が浮き彫りとなってくる。内在化・複数化・断絶性・再帰性・絶対性への反転・非知の次元である。これらは『相対主義の極北』の著者、入不二基義氏の分析によるものであるが、これらの要素をもって相対主義を捉え、その問題点について論じ、相対主義を消滅させるという氏とは異なる視点から、相対主義を保存する立場をとる。

われわれは言語を使って物事を思考する。言語によって対象を表現するということは、言語という枠組みによって対象を切り取るということである。言語によって切り取られなかったものを言語によって表現しようとすると、それでもなお言語の枠組みから外れていく対象との間に、無限の入れ子構造が形成されていく。相対主義の議論において明らかになった、「ある認識の枠組み」と「そうではない認識の枠組み」との間の無限に続く関係と同じように、「言語によって表現されたもの」と「そうではないもの」の関係は無限に続いて行くのである。よって、「考える」ということは終わらない活動なのである。ただし、終わらない活動であるからといって、悲観的になる必要はない。相対主義という主張が、無限後退によって、ある認識の枠組みを主張し続けることによって、その存在を保持していくように、「考える」ということも、終わらない活動であるというまさにそのことによって、存在することが可能だからである。無限性は存在の限界ではない。「考えるということ」、哲学、その存在の根本には無限性があり、そのことによって存在が確証され、肯定されていくのだろう。